

大矢和憲の社会科（第5学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

社会科は、将来の主権者を育てる教科である。すでに社会では、高度情報化、グローバル化、高齢化等が加速度的に進み、多種多様な課題が生じている。このような社会を生きる子どもに、社会の課題を把握して、解決に向けて学習したことを基に社会へのかかわり方を選択・判断する力や、よりよい社会の形成に主体的に参画する態度を育成することが求められる。

このことを踏まえ、昨年度5学年において、社会の課題と自分の生活を関連付け、社会的事象（以下：事象）にかかわる考えを深める子どもを目指した。我が国の産業について学習する5学年では、社会的な空間が国や世界へと広がるため、社会の課題について自分の生活とのかかわり度とらえたり考えたりすることが難しい。そこで、一番身近な社会である家庭生活や学校生活の事実社会の課題を感じられるように働き掛けることで、社会の一員として社会の課題の解決に向けてこれから自分がどのように事象にかかわるのかを具体的・現実的に考える姿を目指したのである。

実践の成果として、社会の課題について自分たちの生活にも問題があるととらえ、社会の課題の解決や持続可能な社会の実現に向けて、自分の生活における具体的・現実的な改善策を調べたり考えたりし、実践しようとする子どもの姿が見られた。

しかし、社会の課題の解決は容易なことではない。子どもは自分の生活における改善策を考えることはできたが、本当に社会の課題を解決するために、自分だけでなく、国民がどのように社会にかかわることが必要なのかを考えることができなかった。国民全体で課題への意識を高めて協力することや、一時的でなく継続して実行することの必要性等に気付けなかったのである。その原因は、子どもが自分の生活の改善策について調べたり考えたりする学習にとどまっていたことにある。

そこで今年度は、子どもが、本当に社会の課題を解決するために必要なことは何なのかを議論し、自分を含めた国民が社会にどのようにかかわることが必要なのかを考える学習に改善する。そして、**社会の課題の解決に向けた方策を見だし、社会へのかかわり方を考える子ども**を目指す。社会の課題の解決に向けて、自分に何ができるか構想したり、様々な立場から多角的に、解決するための方策を考えることを通して、国民が社会にどのようにかかわることが必要なのかを考える姿である。

また、本研究では、子どもが社会の課題の解決に向けて、自分を含めた国民の生活に対して問題意識をもち、家庭科や各種教育で育成する資質・能力を発揮して、実生活で何ができるか構想したり実践したりする姿が期待できる。そこで、主に家庭科や各種教育で育成する資質・能力との関連を見だし、教科等横断的に資質・能力を育成することを視野に入れて単元開発を行っていく。

2 本研究で育成する資質・能力

①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
<ul style="list-style-type: none"> ○社会生活に関する知識・社会には様々な課題があり、解決に向けた取組が行われていること ○基礎的資料を通して、情報を適切に調べまとめる技能 	<ul style="list-style-type: none"> ○社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会へのかかわり方を選択・判断する力 ○考えたことや選択・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力 	<ul style="list-style-type: none"> ○よりよい社会を考え、学習したこと社会生活に生かそうとする態度 ○我が国の産業の発展を願い我が国の将来を担う国民として自覚をもちよりよく課題解決しようとする態度

3 主張する働き掛け

これまでに、社会の課題と従事する人々が行っている取組について学習している。しかし、課題の解決に向けて、自分に何ができるのかや、自分を含めた国民が、どのように社会にかかわることが必要なかまでは考えていない（C0）。このような子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け1

社会の課題と国民の実態調査の結果が分かる資料を提示し、問題と感ずる理由と、これから考えたいことを問う。

社会の課題と自分を含めた国民の生活を関連付けた問いをもたせ、学習問題を設定させるための働き掛けである。

まず、社会の課題と国民の実態調査の結果が分かる資料を提示する。国民の実態調査の結果は、子どもが自分の生活において共感できる（自分もそうかもしれないと感じる）内容である。

子どもは、既習の社会の課題と国民の実態調査の結果を比較してずれを感じ、問題意識をもつ。このような子どもに、なぜ問題と感じるのか理由を問う。子どもは、**事象や人々の相互関係に着目し、国民の生活と関連付けて考える「見方・考え方」**を働かせて、「これでは社会の課題を解決できないからだめだ」などと、国民の実態についての問題点を挙げる（①知識・技能）。

このような子どもに、これからみんなで考えたいことを問う。子どもは、「(社会の課題を解決するためには) どのようにすればよいのだろうか」などと、学習問題を設定する（③態度）。

働き掛け2

子どもの予想を発表させ、「調べる・考える視点」と学習の進め方を問う。

学習問題について調べたり考えたりしていくための視点を明確にし、様々な資質・能力を発揮して学習する見通しをもたせるための働き掛けである。

学習問題を設定した子どもは、共有した問題点を基に、国民の生活における改善策を考え始める。ここで、子どもの予想を発表させる。子どもは、既習の知識を基に大まかな改善策を挙げるが、

具体的な情報が足りないため、調べる必要があると考える。そこで、「調べる・考える視点」と学習の進め方を問う。子どもは、**事象や人々の相互関係に着目し、国民の生活と関連付けて考える「見方・考え方」**を働かせ、収集する情報や考え方、調べたり考えたりする方法を決め、具体的な情報を調べ始める（①知識・技能②思考力・判断力・表現力③態度）。

また、この場面で子どもは、調べ方や有力な情報を教え合いながら情報収集をする（④協働性）。調べた情報や自分の考えは、「ロイロノート※画像等の情報の取込やテキストスライドの作成ができ、それらをつなげて考え、蓄積したり共有したりすることができるアプリ」に記録させ、見いだした改善策をスライドにまとめることを指示する。子どもは、調べた情報をロイロノートに蓄積したり関連付けたりして、具体的な改善策を考えていく（⑤ツール活用能力）。

働き掛け3

考えたことが本当にできるのか問い、実践調査レポートを作成させる。

実生活でできることと難しいことがあることに気付かせ、より現実的に社会へのかかわり方を考えることができるようにするための働き掛けである。

社会の課題の解決に向けた生活の改善策を考えた子どもに、考えたことが本当にできるのか問う。子どもは改善策の不確かさを感じ、「やってみないと分からない」などと、改善策が実際にできるのかどうか確かめたくなる。このような子どもに、実際にできるかどうかを確かめる実践調査をさせ、実践調査レポートを作成させる。実践調査レポートはロイロノートで作成し、実践結果と、できる（できた）こと、難しい（難しかった）ことの三点を、スライドにまとめるように指示する。

子どもは自分の家庭や地域で調査を行い、**事象や人々の相互関係に着目し、国民の生活と関連付けて考える「見方・考え方」**を働かせて、実際にできることと難しいことがあることに気付いたり考えたりする（①知識・技能②思考力・判断力・表現力③態度⑤ツール活用能力）。

働き掛け4

社会の課題の解決に携わっている方に国等の目標を提示してもらい、目標を達成するためには、誰が、どうすればよいか問う。

国民の社会へのかかわり方について議論させるための働き掛けである。

子どもはそれぞれに家庭や地域で実践調査を行ってきた。このような子どもに、レポートの交流を行わせ、その後、できることと難しいことを発表させる。子どもは自分や友達の調査結果を基に、できることと難しいことがあったことを具体的に挙げ、共有する。このように学習問題について追究してきた子どもに、新たな情報として、社会の課題の解決に携わっている人に国等の目標を提示してもらい、そして、「目標を達成するためには、誰が、どうしたらよいか」と問う。子どもは、**事象や人々の相互関係に着目し、国民の生活と関連付けて考える「見方・考え方」**を働かせて、様々な立場を挙げて、多角的に方策を考えていく。そのような子どもに、「つまり誰がどうすればよいか」再度問う。子どもは、**総合して考える「見方・考え方」**を働かせて、国民の社会へのかかわり方を考える（①知識・技能②思考力・判断力・表現力③態度④協働性）。

働き掛け5

社会の課題の解決に携わっている方に子どもの考えに対する価値付けをしてもらい、学習を通して分かったこと・考えたこと・思ったことを問う。

これまでの学習を基に、社会へのかかわり方について考えをまとめさせるため、また、発揮した資質・能力の自覚を促すための働き掛けである。

まず、子どもが考えたことに対して、社会の課題の解決に携わっている方から価値付けをしてもらう。また、子どもに伝えたいことを話してもらい、話を聞いて、子どもは、国等の取組の意味や重要性について理解する。その後学習のまとめとして、学習を通して分かったこと・考えたこと・思ったことを問う。子どもは、**事象や人々の相互関係に着目し、国民の生活と関連付けて考える「見方・考え方」**を働かせて、これまでの学習を基に、社会の課題の解決に向けて、自分を含めた国民がどのように社会にかかわることが必要なのか考えをまとめる（①知識・技能②思考力・判断力・表現力③態度）。このようにして、**社会の課題の解決に向けた方策を見だし、社会へのかかわり方を考える子ども（Cn）**になる。

4 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したCnになったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した「見方・考え方」を働かせることができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を発揮することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け5を受けて、社会の課題を解決するために、自分を含めた国民が社会にどのようにかかわることが必要なのか考えているかどうかを、ワークシートの記述から検証する。
- ② 働き掛け1から、事象や人々の相互関係に着目し、国民の生活と関連付けて考える「見方・考え方」を働かせているかどうかを、発言や活動の様子、考えを表現しているツールやワークシートから検証する。
- ③ 働き掛け1から、想定した資質・能力を発揮しているかどうかを、発言や学習活動の様子、考えを表現しているツールやワークシートから検証する。

5 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業 (7月) 「フード・アクション・ニッポン」(社会・家庭・食育8時間)
- (2) 中間検討会 (9月) 「情報化社会を生きる」(社会・国語・家庭・情報教育14時間)
- (3) 初等教育研究会 (2月) 「自然災害から守る」(社会・家庭・防災教育12時間)